

第3章



ユニバーサルデザインについて

第3章 ユニバーサルデザインについて

アンケート結果を踏まえ、改めてユニバーサルデザインについて共通の理解を深めるため、基本的な考え方、要件、効果等を整理します。

1 ユニバーサルデザインとは

(1) ユニバーサルデザインの定義

ユニバーサルデザインとは、年齢、性別、国籍、個人の能力にかかわらず、一人ひとりの多様性が尊重され、あらゆる場面で社会参加ができる環境を整えることです。

(2) ユニバーサルデザインの基本的な考え方

① 「すべての人」が対象

ユニバーサルデザインの定義から、その対象は「すべての人」となります。

② 「はじめから」の発想

ユニバーサルデザインは、事後の対応ではなく、多様なニーズを考慮して、すべての人が利用できる環境を「はじめから」作るという発想となります。それゆえ、やさしく統一感のある美しいデザインとなります。

③ 「ハード・ソフト両面から最適な手法をめざす」という姿勢

多様なニーズに対応できる環境を実現するという目標を掲げ、粘り強く検討を重ね、ハード・ソフトの両面から、その状況における最適な手法を提供するという姿勢となります。

【図表6】ユニバーサルデザインにおけるハードとソフトの取り組みの整理

分類	取り組み		一般的な例
ハード面 (モノ：物的要素)	「空間」を構成する施設・設備等の整備		空間（駅前、商店街、住宅地、農地等）、施設（道路、公園、建物、交通、サイン）、設備・機器、製品等
ソフト面 (コト：事象的要素)	「空間」の整備を補完する取り組み		施設・設備等の維持管理、運用等
	「空間」の整備以外の取り組み	「くらし」の基盤づくり	情報提供、地域コミュニティ、見守り、活動連携・協働、ボランティア、マナー・ルール、交通安全、防災、防犯等
		「くらし」の質の向上	歴史、景観、文化、芸術、健康、スポーツ、エンターテイメント等
ソフト面 (ヒト：心的要素)	他者へのもてなしを実現する取り組み	「しくみ」の充実・運用	制度、区民参加、組織、推進体制等
		「ひと」の意識醸成	相互理解、学校教育、人材育成、生涯学習、普及啓発等
		「ひと」による思いやりのある配慮、サービス等の提供	気配り・目配り・心配りの対応、接遇、接客等

④ 「本来の価値・感性価値を配慮し提供する」という姿勢

ハード面の改善により、資源が持っている本来の価値を損なう可能性がある場合には、その価値との調和を図り、可能な範囲の整備を行うことが重要です。

また、だれもが本来持っている心地よいと感じる感情（感性価値）とは何かを十分に検討することも大切です。

【図表7】「本来の価値」と「感性価値」の例

分類	【例】
本来の価値	文化遺産の保全・活用の分野では、文化遺産が本来持っている価値を損なわず、次世代へ継承できるように、修理等を行う際は配慮する。
感性価値	段差が生じる日本的な出入口など物理的なバリアとされるものも、本来の価値を提供するために必要な「しつらえ ^{※4} 」と評価し、五感に訴える演出や「もてなし」と併せて提供する。

⑤ 「絶えず改善を考え、実践し続ける」という姿勢

ユニバーサルデザインは、単に「デザインの物理的な結果や特徴」を指す言葉ではありません。すべての人が社会参加できるように、物や空間、活動やサービスなどが人に与える影響をデザインするという考え方と言えます。

時代や社会構造の変化、技術の進歩、ニーズの変化等を踏まえ、すべての人、多様なニーズに対応できる環境の実現に向かって、多様な主体の協働により、絶えず改善を考え、実践し続けるプロセスそのものがユニバーサルデザインと言えます。

(3) ユニバーサルデザインの原則等

ユニバーサルデザインとは、アメリカの建築家であるロナルド・メイス氏によって提唱された考え方です。同氏を含めた建築家や工業デザイナー、技術者、環境デザイン研究などからなるグループが協力して、「ユニバーサルデザインの7原則」がまとめられました（資料3）。

さらに、近年ではユニバーサルデザインに関するさまざまな研究や取り組みが進められており、この7原則以外にも、価値を向上させる「価値向上要件」や、質が高く、的確かつ継続的に進めていくために必要なプロセス（手続き）に関する「プロセス要件」も整理されています（資料4）。

※4 用意や準備のこと。

(4) ユニバーサルデザインによる効果

ユニバーサルデザインの基本的な考え方に基づき取り組んだ結果、期待される主な効果を整理します。

① 地域コミュニティの充実

地域の多様な人が参画し、協働するというプロセスにより、立場の違う人同士がお互いを理解し、「もてなしの心^{※5}」を持つ人が増え、ともに暮らし続けられる地域コミュニティの充実が図られます。

② 豊かなくらしの実現

地域の多様な人が参画し、地域のニーズが的確に反映されることで、その地域にあった豊かなくらしが実現されます。

③ 経済的な効果の期待

多様な人の社会参加が促進されることで、潜在的な需要が掘り起こされ、より良いものが安価に提供される、市場が拡大する等の経済的な効果が期待できます。

④ コストの低減

「はじめから」すべての人を想定した環境づくりを進めることで、環境を整備した後の特別なニーズに対応するために追加する物的・人的コストが発生せず、中長期的な観点から結果的にコストの低減につながります。

⑤ 環境負荷の低減

あらかじめさまざまな変化に柔軟に対応できるような設計とすることで、長期的な利用が可能となり、環境への負荷が低減されます。

⑥ 社会活力の向上

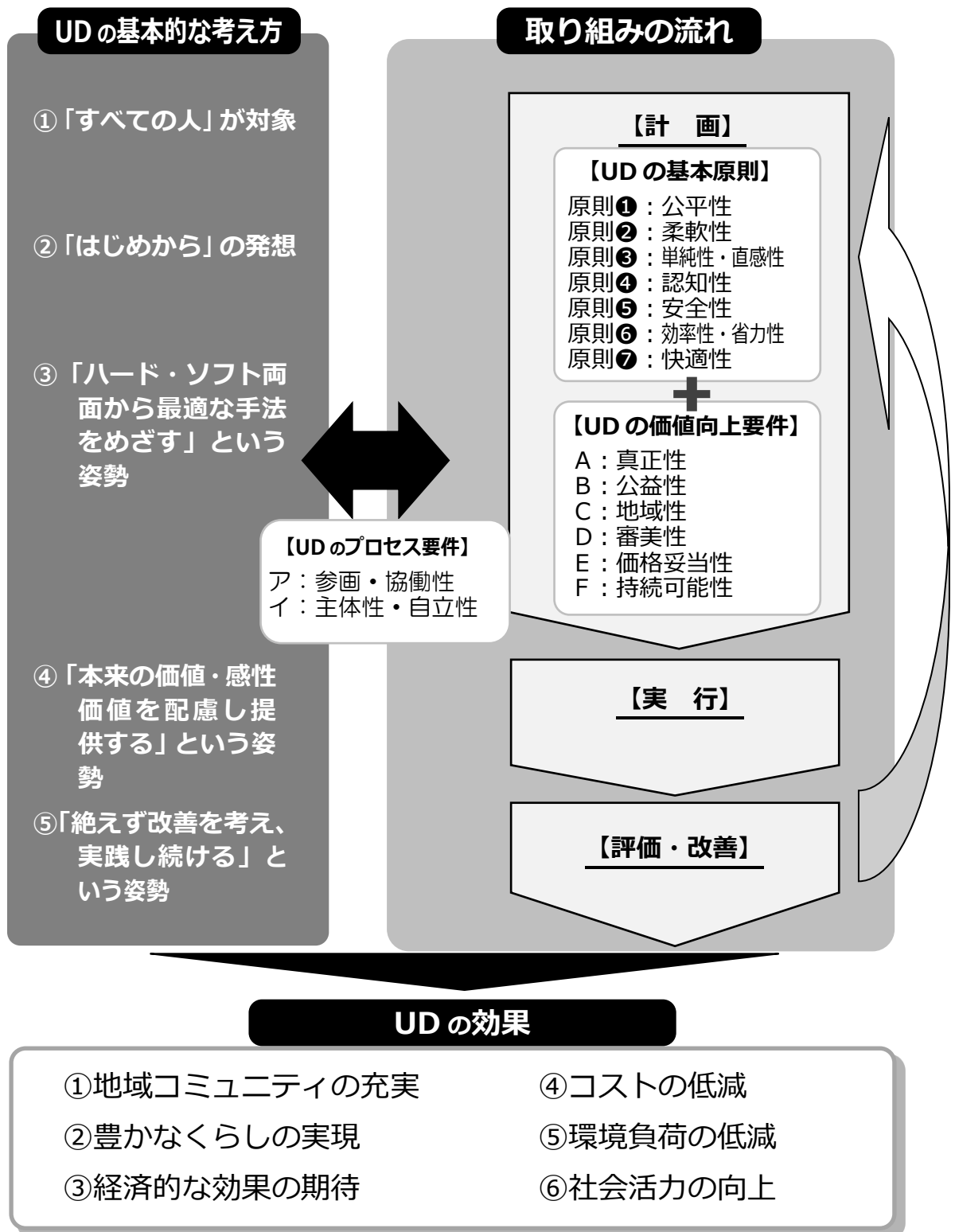
ユニバーサルデザインが推進されることで、すべての人が、あらゆる地域、あらゆる場面で自立的に社会参加できる環境が形成され、人材交流が活発化し、社会全体に活力が生まれます。

^{※5} 板橋区人材育成・活用方針-ひと創り 2025-では、相手の立場に立って、相手が求めていることに誠実かつ自発的に応えようとする姿勢を指しています。

(5) ユニバーサルデザインの全体像

ユニバーサルデザインの取り組みの流れという観点から、これまで述べてきたユニバーサルデザインの「基本的な考え方」「要件」「効果」の関係性を整理し、全体像を示します。

【図表 8】 ユニバーサルデザインの全体像



※表や図の中では、ユニバーサルデザインをUDと略します。

コラム | 板橋型 BF ブロック

区では、道路のバリアフリー化の一環として、交差点の横断歩道部における歩道と車道の段差構造について、区内福祉団体（板橋福祉のまちをつくろう会）と、コンクリートブロック製造会社及び区の三者で協議を重ねてきました。

平成 16 年 10 月には、車いす利用者、視覚障がい者、ベビーカー利用者等に配慮したユニバーサルデザインの「板橋型 BF ブロック」を製品化しました。

車いすやベビーカーの利用者からすると、段差は解消すればよいと思われがちですが、視覚障がい者にとってみれば、段差は歩道と車道の境界を知ることのできるサインとなります。

「板橋型 BF ブロック」は、段差を残して工夫を凝らすことにより、車いすやベビーカー等のスムーズな通行を可能としながら、視覚障がい者（白杖利用者）が歩道と車道を認識しやすい形とすることで、さまざまな人の社会参加の促進に資するものです。

区では、この「板橋型 BF ブロック」の使用を標準仕様として、歩車道分離道路の改修時に整備促進を図っています。

※特徴

- 従来の 2cm 段差をスロープ状にして、車いす、ベビーカー等のスムーズな通行が可能。
- 特殊ゴムピースの突起により、すべり止めと杖や足裏による認識効果が大きい。
- 特殊ゴムピースの黄色が、弱視の方やドライバーに認識しやすい。
- 視覚障がい者（白杖利用者）が通過する際に白杖が必ず特殊ゴムピースに当たり、歩道と車道の境界を認識しやすい。



板橋駅前に設置した様子



板橋型 BF ブロック